池田市制80周年記念 特別展

没後50年

富貴のひと 鍋井克之

その1

今秋、歴史民俗資料館では、池田にもゆかりの深い洋画家・鍋井克之についての特別展を開催します。戦前・戦後と、関西洋画壇を代表する存在であり続けた鍋井。今年は彼の没後50年にあたります。文芸にもたけ、多くの人に愛された鍋井の仕事を、4回にわたってご紹介します。

水色の夢

鍋井克之は、明治21(1888)年、父・良也と母・房の長男として、大阪市西区北堀江に生まれました。

鍋井が「絵描きの夢」に出会ったのは、彼が中学生のころです。自宅(天王寺区北山町)から天王寺中学校(上本町7丁目)への道すがら、ある朝何気なく眺めた、小さな池の水面。水に映った青い空を、絵描きになれば、どんな色にでも塗れる…、そんな空想が、彼の胸を楽しさでいっぱいにしたのでした。

上級生になると、彼は仲間と「スケッチ会」なるものを起こして、水彩画を始めます。そのころの天王寺中学校には、寺内万治郎など、後の画家たちが多く机を並べていました。生涯の親友となる一級下の宇野浩二(小説家)は、鍋井が学校かどこかで開いた展覧会を鮮明に覚えています。

すでに日本画を習っていた鍋井が、本格的に油絵を学び始めたのも、このころでした。洋画になじみのない当時、心配する母をよそに、土佐藩士だった父は「缶詰のレッテル描きになればよい」と、言ったそうです。

▶鍋井克之「五月山より猪名川を望む」(株式会社池田泉州銀行蔵)

絵と文と、芝居と

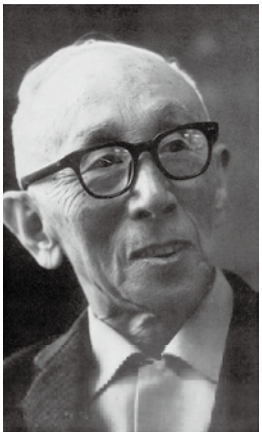
中学卒業後、東京美術学校(現東京藝術大学)に進学した鍋井は、どこか「楽天家」然とした同級生たちの様子に違和感を覚えます。描きたいものが定まらず、その焦りから、しだいに、好きだった文学や芝居にのめり込むようになります。

早稲田大学に進学した宇野浩二は、このころの鍋井に大きな影響を与えた人物の一人です。宇野を介して、彼は新興芸術を志す多くの若者たちと交流し、そのエネルギーを分かちました。詩や小説、なかでも、熱を入れたのが演劇です。早稲田出身だった澤田正二郎(のちの新国劇俳優)らと劇団を起こし、これが元で卒業が1年遅れることとなりました。

卒業制作がその年の二科展で受賞し、晴れて画家の道を歩み始めた鍋井は、その才能をいかんなく発揮していきます。大正13(1924)年には、小出楢重、黒田重太郎らと大阪で美術学校(信濃橋洋画研究所)を開くなど、彼は関西画壇、さらには大阪のモダニズムの先端を走る存在として、活躍しました。

池田の大阪人

昭和5(1930)年11月、鍋井は、池田の北轟木(現住吉1丁目)へ引っ越します。立地の都合で画室が新築できず、どうせなら繁華な市内から「隠れ住む」ような郊外へ出たいと思ったからだ、と彼は述べています。「周囲は植木屋に取り囲まれ、土の色が黒くて、竹藪や樹のしげりがあちこちにあり一寸武蔵野に似ていた」(池田市勢要覧『いけだ』'66)この土地をいたく気に入り、鍋井は亡くなるまでの40年余りを、この地で過ごしました。



鍋井克之

あいかわらず、1年の多くを写生旅行に費やす日々でしたが、それでも、家族と暮らす池田の画室からは、名画やユーモアに富んだ随筆が生み出されていきます。

行動力とアイデアに富み、その魅力で人を惹きつけた鍋井。その力は芸術振興にも発揮され、本市の美術協会創設にも尽力しました。昭和44(1969)年、81歳で亡くなるまで、彼はトップランナーであり続けたのです。

次回は、鍋井の画業をとおして、彼の「世界」を見ていきます。

◆問い合わせは歴史民俗資料館(☎751・3019)